発達段階に応じた教育心理学的生徒理解と指導

今　野　紀　子*

Educational Psychological Student Understanding and Guidance According to Development Stage

KONNO Noriko*

キーワード：発達段階，教育心理学，生徒理解，生徒指導，教育実習

1．はじめに

適切な生徒理解と指導には，教育心理学の知見を基にした心身の発達の視点が不可欠である。文部科学省子どもの徳育に関する懇談会「子どもの徳育の充実に向けた在り方について（報告）」（2009）の中では，『子どもの豊かな心身の育成 にあたっては，子どもの発達段階における成長の特徴を，従来より一層踏まえて，適切な対応と支援を行っていくことが重要である。』との見解が示されている[1]。また，生徒指導に関する学校・教職員向けの基本書である生徒指導提要（2010）では，生徒指導の最終的なねらいは人格の発達的形成にあるとし，そのために，人格の発達についての一般的な傾向とその特徴について客観的・専門的な知識を持つことの必要性が示されている[2]。本研究ノートでは，中学生，高校生の発達段階に応じた教育心理学的生徒理解と指導について，教員養成課程での学びをもとに，教育実習を終えた学生の振返りを交えながら検討する。

2．教育心理学的生徒理解と指導とは

教育職員免許法[3]及び同法施行規則の改正[4]がなされ，2019 年度から教職課程コアカリキュラムに沿った新たな教職課程が開始された[5]。本学が設置する教育心理学は，免許上の区分として，教育の基礎的理解に関する科目「幼児，児童及び生徒の心身の発達及び学習の課程」に配置されている。教職課程コアカリキュラムにおける教育心理学の全体目標は，『幼児，児童及び生徒の発達及び学習の過程について，基礎的な知識を身につけ，各発達段階における心理的特性を踏えた学習活動を支える指導の基礎となる考え方を理解する。』とあり，教育心理学を履修することにより，学生が発達段階に応じた指導の基礎を修得することが示されている。この全体目標を内容のまとまりごとに分化させた一般目標では，(1) 幼児，児童及び生徒の心身の発達の過程及び特徴を理解すること，(2) 幼児，児童及び生徒の学習に関する基礎的知識を身につけ，発達を踏まえた学習を支える指導について基礎的な考えを理解すること，とされている。その上で，一般目標に到達するために達成すべき規準として到達目標が次のように示されている。(1) 幼児，児童及び生徒の心身の発達の過程では，①幼児，児童及び生徒の心身の発達に対する外的及び内的要因の相互作用，発達に関する代表的理論を踏まえ，発達の概念及び教育における発達理解の意義を理解して

＊システムデザイン工学部人間科学系列教授　Professor, Department of Humanities, Social and Health Sciences, School of System Design and Technology

いる，②乳幼児期から青年期の各時期における運動発達・言語発達・認知発達・社会性の発達について，その具体的な内容を理解している，(2) 幼児，児童及び生徒の学習の過程では，①様々な学習の形態や概念及びその過程を説明する代表的理論の基礎を理解している，②主体的学習を支える動機づけ・集団づくり・学習評価の在り方について，発達の特徴と関連付けて理解している，③幼児，児童及び生徒の心身の発達を踏まえ，主体的な学習活動を支える指導の基礎となる考え方を理解している，とされている。

ここから，本稿での発達段階に応じた教育心理学的生徒理解と指導とは，各発達段階における心理的特性を踏え，生徒の心身の発達および学習活動を支えることを目的とした生徒理解・指導とする。

3. 発達の理論

発達に関する代表的理論とは，具体的にはどのようなものなのだろうか。岩田ら（2017）は，教職課程の「教育心理学」の授業で通常用いられているテキスト 45 点を分析し，思春期・青年期の内容がどのように扱われているかについて検討した[6]。その結果，6 割以上のテキストが，「発達段階」（ピアジェの認知発達段階，エリクソンの心理社会的発達段階等の理論を含む）を取り上げながら，その中で思春期や青年期の心理的な特徴についても言及していること，2 割弱のテキストが「発達課題」（ハヴィガースト等）を取り上げる中で，思春期や青年期について扱っていることを報告している。つまり代表的な発達段階の理論として，少なくともピアジェの認知発達段階，エリクソンの心理社会的発達段階，ハヴィガーストの発達課題を踏まえた発達の概念や発達段階に応じた心理的特性を基礎的知識として身につけた上での生徒理解・指導が求められている。

4. 発達段階に応じた支援

文部科学省「子どもの徳育に関する懇談会」における子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題の中で，『子どもは成長するに伴い，視野を広げ，認識力を高め，自己探求や他者との関わりを深めていくが，そのためには，発達段階にふさわしい生活や活動を十分に経験することが重要である』とし，子どもの発達段階に応じた支援の必要性について述べている。この中で，発達段階ごとの子どもの成長の主な特徴および特に重視すべき課題を次のように示している。（以下，中学校・高等学校部分を抜粋）

【青年前期（中学校）】

特徴：思春期に入り，親や友達と異なる自分独自の内面の世界があることに気づきはじめるとともに，自意識と客観的事実との違いに悩み，様々な葛藤の中で，自らの生き方を模索しはじめる時期。友人関係に自らへの強い意味を見いだす。さらに，親に対する反抗期を迎えたり，親子のコミュニケーションが不足しがちな時期でもあり，思春期特有の課題が現れる。仲間同士の評価を強く意識する反面，他者との交流に消極的な傾向も見られる。性意識が高まり，異性への興味関心も高まる時期でもある。現在の我が国においては，生徒指導に関する問題行動，不登校，引きこもりなどの表出，増加傾向がみられる。

重視すべき課題：①人間としての生き方を踏まえ，自らの個性や適性を探求する経験を通して，自己を見つめ，自己の在り方を思考すること，②社会の一員として自立した生活を営む力の育成を図ること，③法やきまりの意義の理解や公徳心を自覚すること。

【青年前期（高等学校）】

特徴：親の保護のもとから，社会へ参画し貢献する，自立した大人となるための最終的な移行時期。思春期の混乱から脱しつつ，大人の社会を展望するようになり，大人の社会でどのように生きるのかという課題に対して，真剣に模索する時期。しかしながら，自らの将来を真剣に考えることの放棄や刹那主義的な傾向の若者の増加が危惧される。さらには，特定の仲間の集団の中では濃密な人間関係を持つが，集団の外の人に対しては無関心となり，社会や公共に対する意識・関心の低下といった指摘もある。

重視すべき課題：①人間としての在り方生き方を踏まえ，自らの個性・適性を伸ばしつつ，生き方について考え，主体的な選択と進路の決定を行うこと，

②他者の善意や支えへの感謝の気持ちとそれにこたえること，③社会の一員としての自覚を持った行動を行うこと。

以上の特徴・課題に留意した発達段階に応じた支援，生徒理解・指導がポイントになる。

5．教育実習を終えた学生の振返りから

本学では，教育心理学の配当学年は1年生であり，配当期は後期（半期）となっている。2018年度に教育心理学を履修し，その3年後の2021年度に中学校・高等学校で教育実習を終えた学生（30名）の振返りを通して，発達段階に応じた教育心理学的生徒理解と指導について検討する。まずは以下に学生の教育実習の振返りを示す。

【生徒の様子・印象】

・教師の指示に対して素直であり，落ち着いていると感じた。（中学校）

・落ち着きのある生徒が多いと感じた。髪の毛を染めてしまっている生徒などいなくなっていたので変わったなと感じた。（中学校）

・周りに気を遣いながら生活をしている生徒がとても多く，周囲には丁寧な話し方で接していた。（中学校）

・自分が中学生の頃と比べて，どの生徒も礼儀正しく，先生に反抗的な態度をとる生徒がいなくなったように感じた。先生と生徒との信頼関係が結べているのか彼らの表情が明るく，授業にも意欲的に取り組む生徒が多かった。（中学校）

・自分が生徒だったころとは違い，多くの子が勉強や行事に対して積極的だった。（中学校）

・私が中学生だった頃を振り返り，生徒は落ち着いているように見えた。授業開始の2分前には着席をしていたり，休み時間に勉強をしていたりする生徒もいた。また，朝礼の時間の待ち時間も，静かに待っていた。（中学校）

・当然，教員を困らせるような行動をする生徒が一部いることは想像通りだったが，そうした生徒に対してしっかりと注意できる生徒もおり，生徒間で過剰なまでの格差が無く，自浄作用が機能している点については，中学1年生にしてはしっかりしているという印象を受けた。（中学校）

・真面目な生徒が多く，将来についてしっかりと考えられる生徒が多かった（高等学校）。

・将来のことについて相談する生徒がいて立派だなと思った（高等学校）。

・授業外のところでも疑問を追求する姿勢が見られた。（高等学校）

・自身が生徒の頃に比べてまじめな生徒が多いように感じた。授業にも積極的に取り組む生徒が多かった。（高等学校）

【生徒理解を深めるための工夫】

・できるだけ休み時間には教室にいるようにして，生徒ごとに趣味や好きな事を聞いて距離を縮め，授業にもその話を活かすようにした。

・生徒ごとの一言日記や自習ノートを介してのコミュニケーションを工夫した。

・授業中，休み時間や掃除時間，放課後など接する機会を多くした。

・朝の挨拶や廊下ですれ違った際の挨拶を大切にした。生徒は教師の言動をよく見ているため，生徒のことをよく見て，言動に気をつける必要があると感じた。

・笑顔で明るく接する，生徒と同じ目線にたって会話をすることを心がけた。

・実習の途中からにはなるが，自分の担当学級の生徒全員と1人ずつ会話をした。

・日々のコミュニケーションの積み重ねが大切だと感じた。指導教員の方が行っていたように，生徒の授業外での部活や家庭の状況から生徒に変化がないか，元気がなかったとしたら，どこに原因があるか考え観察することも重要だと思った。

【問題と感じた点】

・学校に来ていない生徒も多いように感じた。担当した学級でも，2人学校に来ていない生徒がいて，別の1人も午後から学校に来る様子であった。（中学校）

・給食の時間，好き嫌いの激しい生徒が多いと感じた。給食をほとんど残してしまう生徒が5人以上いたので，食生活が心配になった。（中学校）

・全体的におとなしいように感じた。自分が生徒だったときは学校全体的に騒がしく良くも悪くも活発な生徒が多かった。（高等学校）

【実習生自身の課題】

・授業をしたのは1年のクラスだったが，母校の印象は3年の頃の印象が強かったため，思わぬところで「この内容は知らなかったのか」というように知識量を過大評価しすぎていた節があったと感じる。
・中学の頃は，もっといろいろなこと（人間関係など）を考えていたような気がするが，教育実習生の立場に立つと子供たちがどのようなことを考えているのかが，あまりわからなかった。
【その他】
・自分が生徒だった頃は元気で発言量も多かった記憶があるが，教育実習に行った学校の生徒はまじめで物静かな生徒が圧倒的に多く感じた。自分が担当したのが中学校の2年生であったが，コロナの影響で去年1年間，学校にまともに登校していないため，実質中学 1 年生から友達が増えていないのが原因の1つではないかと思う。
・自分たちの時と比べて，生徒同士に少し距離があるように見えた。コロナで入学時期も遅く，イベント事もあまりできていないので，そういうところでクラス間の絆とか，距離感がまだとれていないのかと思った。

実習生の立場で感じた生徒の様子・印象では，自身の中学・高校時代と比較しながら，生徒の姿が観察されたようであった。生徒理解を深めるための工夫では，試行錯誤しながら生徒をできるだけ理解するために，生徒と接する機会を多くし，心理的距離を縮めるためのコミュニケーションを図ろうとの工夫があった。教育実習のわずか2〜3週間の期間で，外部から来た実習生という特別な状況もあり，生徒が素のままの姿を出しているわけではないだろうが，発達段階に応じた，最低限の生徒観察・生徒理解の姿勢はできたのではないかと思われる。

6. 今後の課題

発達段階において，中学校では友人関係や異性への関心が高まる時期であり，そこから自己の在り方を模索していく。高等学校でも同様に，自立した大人になるために，仲間集団での人間関係が必要な時期である。中学・高等学校とも発達段階上，学校といった集団の中での様々な人とのかかわりが大きな意味を持っている。しかしながら，新型コロナウイルス感染症の影響で，社会は大きく変化した。いわゆる三密（密閉・密集・密接）を避け，不要不急の外出が制限され，学校では ICT を活用した遠隔授業の導入が急速に進んだ。互いに手を伸ばして届かない距離（2メートル以上）の確保，密接した場所での会話や発声を避けること，マスクの着用が日常的に求められるようになった。コロナ禍において，発達段階にふさわしい生活や活動を十分に経験することが困難な状況となった。令和2年の児童生徒の自殺者数は 499 人で，前年の 399 人と比較して大きく増加した[7]。教育実習の振返りでは，登校ができず友達が増えていない，クラスでの帰属意識が薄いといったことが指摘された。今後，ウイズコロナ・ポストコロナへの移行を含めて，このような環境，外的要因が発達段階に与える影響を検討しながら，生徒理解を深め，生徒指導，支援をする必要がある。

参考文献　等

1）文部科学省（2009）子どもの徳育に関する懇談会「子どもの徳育の充実に向けた在り方について（報告）」
2）文部科学省（2010）生徒指導提要
3）教育公務員特例法等の一部を改正する法律（平成 28 年 11 月 28 日法律第 87 号）
4）教育職員免許法施行規則及び免許状更新講習規則の一部を改正する省令（平成 29 年文部科学省令第 41 号）
5）文部科学省（2017）教職過程コアカリキュラムの在り方に関する検討会「教職課程コアカリキュラム」
6）岩田美保，大芦治，樽木靖夫，小山義徳（2017）「教育心理学のテキストで扱われている「青年期」「思春期」に関する内容」，千葉大学教育学部研究紀要第 66 巻第 1 号，pp.59-63.
7）厚生労働省（2020）自殺統計：各年の状況